

平成27年度 東京外国語大学附属図書館第16回特別展示



Munshi Newal Kishore

近代インドの華麗な文化的世界  
ナワルキショール・プレスの出版物を中心に

平成27年12月7日(月)～平成28年1月29日(金)

開室時間：平日 9時—17時

会場：アジア・アフリカ言語文化研究所1F 資料展示室

協力：東京外国語大学拠点 現代インド研究センター

共催：東京外国語大学社会・国際貢献情報センター

## はじめに

第16回を迎える本年の特別展示では、「近代インドの華麗な文化的世界—ナワルキショール・プレスの出版物を中心に—」と題し東京外国語大学附属図書館が所蔵する南アジア地域に関連する貴重書の中から、「ナワルキショール・コレクション」および、21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」の活動の中で収集された文献資料を中心に紹介します。

### ○ナワルキショール・プレスの概略

ナワルキショール・プレスは、ムンシー・ナワルキショール(Munshi Newal Kishore, 1836～1895)により1858年にインドのラクナウーに創始された出版社です。ウルドゥー語やヒンディー語以外にも、ペルシア語、アラビア語、サンスクリット語、ベンガル語などの書籍を4,000点以上出版し、近代ウルドゥー、ヒンディー文学の発達、普及に大きな役割を果たしました。

ウルドゥー語354冊、ヒンディー語531冊など、本学が所蔵するナワルキショール・プレスの出版物は、1971年および1973年に実施された東京大学東洋文化研究所との合同海外学術調査「インド・パーキスタンにおけるヒンドゥー・ムスリム両教徒の宗教生活に関する実態調査」による、鈴木斌、田中敏雄両本学名誉教授によるラクナウーでの収集の成果です。『南アジア史資料デジタル・アーカイブ(SARDA)』の一部として以下のウェブサイトで、デジタル化して公開されています。

【南アジア史資料デジタル・アーカイブ(SARDA)】

[http://repository.tufs.ac.jp/doc/sarda/index\\_j.html](http://repository.tufs.ac.jp/doc/sarda/index_j.html)

【ナワルキショール関連図書目録】

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/guide/list/navalkishor.html>

### ○21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」の概略

2002年(平成14年)から5年にわたって遂行されたプログラムです。これは、本学のグランドデザインに謳われた将来構想の一翼を担い、領域横断的かつ総合的な地域文化研究を推進し、アジア・アフリカ諸言語に特化させたアジア太平洋地域における中核的な史資料ハブセンターを構築しようとするものです。

この活動で非収奪的に収集された文献資料の一部が、デジタル化・ウェブ公開されています。本展示ではこれら資料の中から南アジアに関連する文献資料を選定して展示しています。こちらから以下のウェブサイトから閲覧することができます。

【史資料ハブ地域文化研究拠点(C-DATS) デジタル・アーカイブ】

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/6>

【拠点ホームページ】

<http://www.tufs.ac.jp/21coe/area/index-j.html>

---

(編集注)

・「ムンシー・ナワルキショール」のローマ字転写は、以下の表記を採用しました。

Blackburn, Stuart and Vasudha Dalmia (Eds). 2004. *India's literary history : Essays on the nineteenth century.*

Delhi: Permanent Black

## ○ベンガル語資料の概略

2012年（平成24年）に本学に新たに誕生したベンガル語専攻に関連する文献資料として、非ヨーロッパ人として初めてノーベル文学賞を受賞した詩聖タゴールの作品やその日本語訳を中心に展示しています。

ベンガル語が話されている地域は、東側にムスリムが、西側にヒンドゥーが多く暮らすなど、文化的にも多様性を有しています。複雑な歴史をたどり、国家や宗教といった枠組みを超えた「ベンガル文化」の核となっているベンガル語文献の一部を紹介しています。

それでは、本学附属図書館が所蔵する貴重な文献資料をご覧ください。

2015年12月7日

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

萬宮健策（まみや けんさく）

### 謝辞

本年の特別展示では、企画段階から萬宮准教授に多大なご助力をいただきました。  
また、以下の先生方に資料選定及び解説作成にご協力いただきました。

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 藤井毅（ふじい たけし）教授

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 萩田博（はぎた ひろし）准教授

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 丹羽京子（にわ きょうこ）准教授

この場をお借りしまして、諸先生方に御礼申し上げます。（附属図書館）

---

#### （編集注）

- ・展示資料のうち、各デジタル・アーカイブで画像公開されているものについては、巻末の資料一覧に URL を記載しております。併せてご覧ください。
- ・公開画像のファイル形式は DjVu です。閲覧には DjVu ビューアが必要です。  
以下より無料でインストールできます。

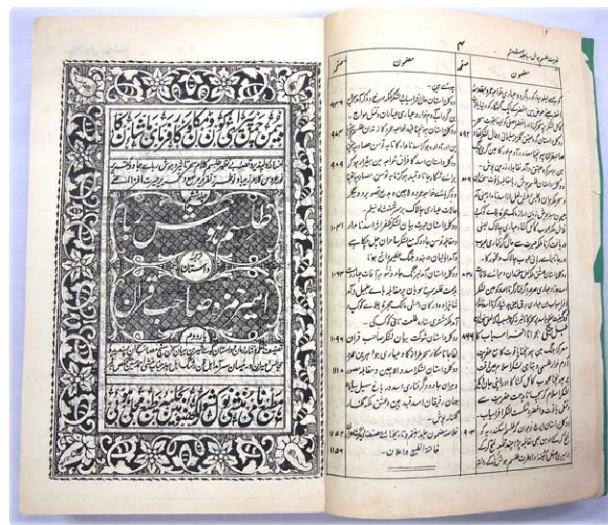
[https://www.cuminas.jp/products/doc\\_viewer](https://www.cuminas.jp/products/doc_viewer)

## 展示ケース1 物語の世界から小説へ

アワド藩王国の主都ラクナウ（現ウツタルプラデーシュ州の州都）では絢爛たる文化が生み出されていったが、その中で「語り」を聞くという伝統が非常に発達していった。アワド藩王国の歴代の藩王はイスラーム教のシーア派に属していた。シーア派の人々にとっては、第4代カリフであるアリーの息子フサインがカルバラーの地で殉教したことが大きな宗教的意味を持ち、イスラーム暦の1月、ムハッラム月にはその殉教を悼んでさまざまな宗教行事が行われる。アワドの地ではそうした宗教行事のひとつとして、マルスィアと呼ばれる詩型でフサインの殉教の悲劇が詠まれたものを朗誦するマルスィア・ハーニーと呼ばれる行事が盛んに行われてきた。こうした「語り」の伝統は他の文学分野でも見られ、そのなかでも有名なのが「ダースターン」と呼ばれる伝奇文学である。

ダースターンはその起源はペルシア文学にあるが、ウルドゥー文学では19世紀に盛んになり、ラクナウの地ではこうした物語を語る「ダースターンゴー」と呼ばれる専門的職業もあり、物語を求める民衆によって熱狂的に支持されていた。今回展示しているのはそうしたダースターンのうちでも最も有名な *Tilism-i hosh rubā* طلسم بوش ربّا 『ティリスメ・ホーシュルバー』（資料No.1、以下Noのみ記載）という作品である。この作品は預言者ムハンマドの叔父アミール・ハムザの伝奇的な冒険譚が中心となったものであるが、ここには「千夜一夜物語」に連なるような華麗な物語的世界が展開されている。興味深いことにペルシア語に起源を発するとは言われているものの、このダースターンに登場する文化はまさしくアワドの文化であることだろう。わが国ではミール・アンマン作の『四人の托鉢僧の物語（※）』という作品が本学名誉教授の故蒲生礼一先生によって翻訳されているが、この作品でもダースターンの心躍るような世界を垣間見ることができる。

（解説：萩田博）



No.1 *Tilism-i hosh rubā*

### （編集注）

※『四人の托鉢僧の物語』は、以下のタイトル・請求記号で附属図書館に所蔵されています。

『四人の托鉢僧の物語：印度回教文学古典』生活社, 1942, 請求記号：小林文庫/29101

『四人の托鉢僧(ダルヴェーシュ)の物語』(東洋文庫 523) 平凡社, 1990, 請求記号：A/911-9/2

**Prem sāgar** پریم ساگر 『プレーム・サーガル』(No.2) は、ヒンドゥー教のクリシュナ神の行状を描いたものである。この作品は、カルカッタ（現コルカタ）の「フォート・ウィリアム・コレッジ Fort William College」でインドの古典作品をヒンディー語に翻訳する作業に従事していたラッルージー・ラールがヒンドゥー教の聖典『バーガヴァタ・プラーナ』を翻案したものであり、インドの民衆に深く根づくクリシュナ神への信仰を知る上でも興味深いものとなっている。（解説：萩田博）

**Go-dāna** गो-दान 『ゴードーン』(No.3) は、ヒンディー語長編小説『牛の捧げ物』の初版本である。著者のプレームチャンド Premacanda प्रेमचंद（1880.7.31～1936.10.8）は、ウルドゥー語・ヒンディー語双方の現代文学草創期を代表する作家であり、本書は、その最後の長編小説にあたる。ダストカバー（本の表紙をくるむジャケット・カバー）をはじめとし、刊行時の形態をそのままにとどめており、インド国内のみならず世界的に見ても稀少本に属する。現行諸版では、作品名は **Godāna** गोदान と表記されるが、初版では、**Go-dāna** गो-दान となっている点は、文学史叙述においても注目に値する。本書は、本学名誉教授の故蒲生礼一先生が、文部省在外研究員としてインド滞在中に購入したものである。『蒲生文庫』には、この他にもプレームチャンドの初版本が数点含まれている。（解説：藤井毅）



No.3 **Go-dana**

**Vaqā'i-i Shāh Mu'īn al-Dīn Chishtī : kah tarjamah-i bāb-i sivvum-i Hidāyat al-Mu'īn ast**

وقائع شاه معین الدین چشتی : کہ ترجمہ باب سوم ہدایۃ المعین است  
(No.4)

ムイーンツディーン・チシュティー Mu'īn al-Dīn Chishtī (1141～1236) は、南アジアにチシュティー派イスラーム神秘主義（スーフィズム）をもたらした人物として知られており、南アジアを代表する聖者の1人である。アジュメール（インド、ラージャスターン州）にある廟は、パーキスターンからも参詣者が絶えない。本書はそのムイーンツディーン・チシュティーの年譜のペルシア語版である。（解説：萬宮健策）

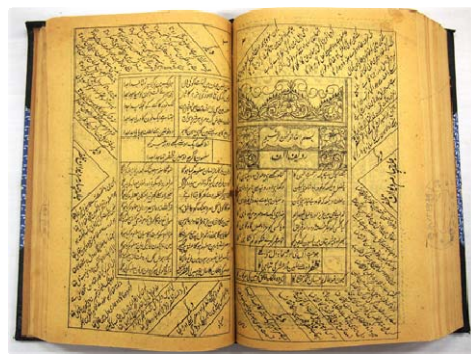
## 展示ケース2 ウルドゥー詩歌の世界

ウルドゥー文学の精髓は定型恋愛抒情詩ガザルを中心にした詩歌にあるといっても過言ではない。ガザルのルーツはアラビア語の詩にさかのぼることができるが、ウルドゥー・ガザルに直接の影響を及ぼしたのはペルシアのガザルであった。インド亜大陸にイスラーム教徒が進出し、12世紀以降になると、デリーを中心にしてデリー諸王朝やムガル朝の時代が続いたが、この間南インドのデカンの地にもムスリムの勢力が及び、ムスリム王朝が成立していった。ウルドゥー文学はそのデカンの地で最初の発展を遂げることになり、ガザルやその他の詩もその地で詠まれるようになった。北インドの地でウルドゥー文学が発展するのは18世紀に入ってからであった。このころはムガル宮廷や貴族の庇護を受ける詩人たちが多く、文学史ではデリー詩派の時代と呼ばれている。ムガル朝の没落にともない、一地方政権であったアワド藩王国による庇護を求めて、その首都ラクナウーに多くの文人たちが移り住むことになり、やがてウルドゥー文学の一大中心地となっていった。こうした文学的香りあふれるラクナウーにナワルキショール・プレスが設立されたわけである。

ガザルではシラブル（音節）をもとにした長・短の音の組み合わせのパターンがいくつもあり、これをバフル（韻律）と呼んでいる。また詩句の最小単位であるミスラが決まった順番で同じ脚韻を持つ構造となっているため、ガザルは非常に音楽性あふれるものとなっている。詩人たちが集まり、作品を朗誦する会をムシャーイラと呼び、南アジアにとどまらず移民の多いイギリスやアメリカ、カナダ、さらには我が国を含め世界各地でこうした詩会が開かれている。この詩会では聴衆が詩の朗読に熱狂する姿を目にすることができるのだが、それはガザルの持つ音楽性によるところも大きいのである。またインド亜大陸ではこのガザルを歌詞として作られたガザル歌謡も大変に人気がありジャグジート・シングやグラーム・アリーなど有名な歌手が今も民衆を酔わせている。ガザルは「恋愛抒情詩」と訳しておいたが、この恋愛は現世的な恋愛でもありうるし、神への愛を詠ったものと解釈することも可能なのである。こうしたことがガザル詩の含蓄をより深いものとしているのである。

ウルドゥー語の詩集はある詩人の詩全集であるクッリヤートとガザルを集めたディーワーンとがある。今回展示しているものうちソウダー（1713～1781）（No.5）とザファル（1775～1862）（No.6）のものはクッリヤートであり、ナーシフ（？～1838）（No.7）のものはディーワーンである。ソウダーはデリー詩派を代表する詩人であり、為政者やパトロンを讃えるカスィーダと呼ばれる詩を得意とした人物である。ザファルはムガル朝最後の皇帝であり、インド大反乱の責任を負わされ、ラングーンに流されてその地で亡くなった。彼はそうした歴史的人物であるが、同時にウルドゥー詩をこよなく愛した詩人としても有名である。ナーシフはデリー詩派に続くラクナウー詩派の始祖とされ、様々な比喻を使い、華麗な詩を読んだことで知られている。

（解説：萩田博）

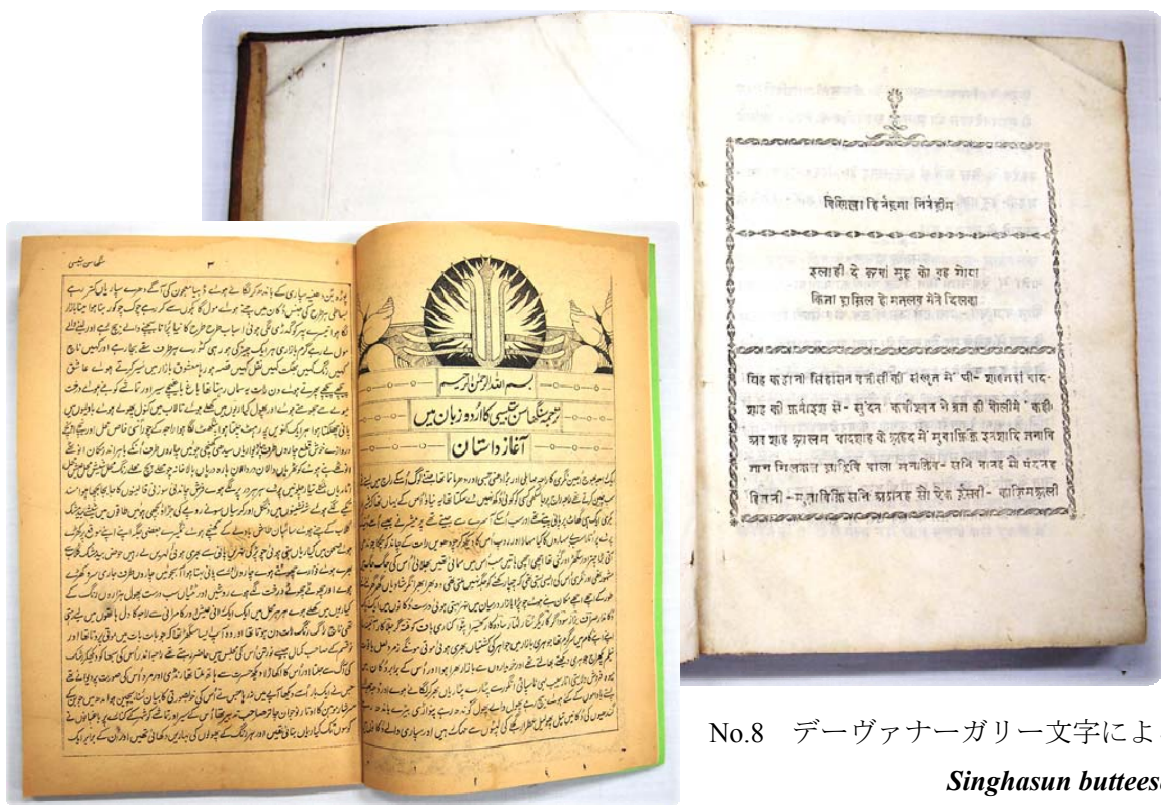


No.6 *Kulliyāt-i Zafar*

### 展示ケース3 デーヴァナーガリー文字とウルドゥー文字で出版された物語

**Singhasun butteese** 『スィンガーサン・バツィーサー (獅子座三十二話)』(No.8) は、キリスト暦成立前後にインド・ウヅジャインを支配したヴィクrama王の事績にまつわる民俗伝奇物語集である。原形となる物語は、サンスクリット語で11世紀以降に成立したと考えられる。本書は、そのブラジ・バーシャー-Braj Bhasha 方言訳をさらにヒンドウスターニー語(現在のヒンディー語)に重訳したもの。「フォート・ウィリアム・コレッジ Fort William College」のヒンディー語教育の読本として用いられた。(解説: 藤井毅)

南アジア出版史のみならず、印刷史においても屹立する稀観書である。翻訳の際にはヒンドゥー教徒のラルジー・ラール・ジーとイスラーム教徒のカーズィム・アリー・ジャワーンが協力した。1805年にデーヴァナーガリー文字を使って出版(No.8)され、のちにウルドゥー文字でも出版(No.9)されることになった。(解説: 萩田博)



No.8 デーヴァナーガリー文字による  
**Singhasun butteese**

No.9 ウルドゥー文字による **Singhasan battisi**

## 展示ケース4 フォート・ウィリアム・コレッジの教科書

イギリス東インド会社によりカルカッタ（現コルカタ）に創建された「フォート・ウィリアム・コレッジ Fort William College」は、イギリス人社員とその子弟に近代インド諸語の教育を施したことから、数多くの文法書・教科書・辞書を刊行することになった。

**Rāja-nīti** 『ラージ・ニーティ』(No.10) は、ヒンディー語教育の枠組みのなかで教授されたブラジ・バーシャーBraj Bhasha 方言の読本である。元となったのは、サンスクリット語の説話集『ヒトーパーデーシャ Hitopadesa』(『有益なる教え』)。本書は改訂版だが、初版は失われたとされている。

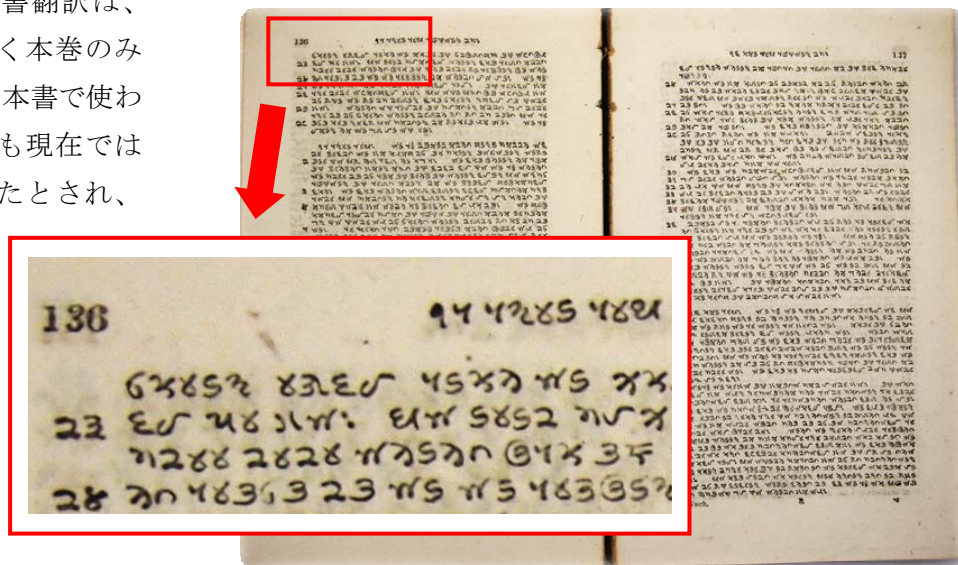
編訳者のラッラー・ラールは、同校の「言語教育助教 Bhasha Munshi」として名を馳せ、**General Principles of inflection and conjugation in Bruj B,hak,ha** (No.11) を含め多くの著述を残した。  
(解説：藤井毅)

## 展示ケース5 失われた文字で書かれた聖書

**The Holy Bible** (No.12) は、現在のパーキスタン、パンジャブ地方南部のムルターン一帯で用いられる言語（ムルターンー、あるいはランダー/ラフンダーなどと呼ばれる）に翻訳された聖書である。使用されている文字は、現在使われるシャームッキー（Shahmukhi）文字ではなく、ホージキー（Khojki/Khojiki）文字と類似した在来固有の文字体系であることを特徴とする。

この言語への聖書翻訳は、完遂されることなく本巻のみの刊行で終わった。本書で使われている文字体系も現在では用いられなくなったとされ、文字通り「失われた文字で書かれた稀観本」と言える。

(解説：藤井毅)



No.12 **The Holy Bible**



## 展示ケース6 絵画で見る近代インド

**Les Hindoûs** (No.13) は、『インド誌』全4巻の初版である。288葉の手彩色エッチングから成る。著者の Frans Baltazard Solvyns (Frans Balthazar Solvijns, 1760.7.6~1824.10.10) は、アントワープ生まれで1791年から1803年にかけてカルカッタ(現コルカタ)に滞在した船付画家であり、ヨーロッパ帰着後刊行したのが本書である。18世紀末から19世紀初頭のベンガル社会のありさまが、生き生きと描かれており、民俗資料としても貴重であるばかりか、インド絵画史上、先駆的な作品となっている。きわめて少数しか刊行されなかったため、本書を所蔵する図書館は世界的にみても極めて限られている。特に本学所蔵本は、余白部分がカットされることなくオリジナルの形態をとどめており、その質の高さにおいて他を凌駕する。アメリカのテキサス大学オースティン校のR.ハードグリーヴ・ジュニア教授が、The Solvyns Project (<http://laits.utexas.edu/solvyns-project/>) を立ち上げ、ほぼ忘却されていたこの画家に光を当てた。(解説：藤井毅)



NO.13 *Les Hindoûs*, t.2  
Behaho, or Marriage.



NO.13 *Les Hindoûs*, t.2  
Nautch A Hindoo Dance.

## 展示ケース7 タゴールと日本

南アジアの近現代文学の中で、タゴール (1861.5.7～1941.8.7) は例外的に早い時期から日本に紹介されてきたが、それは1913年のノーベル賞受賞を契機としたものであった。受賞作となったのは、タゴール本人による英訳版『ギータンジャリ』で、初期の日本語訳はこうした英語版からなされた。

『ギタンジャリ (歌の祭賛) 印度新詩集』(1915・大正4年) (No.15) は、この『ギータンジャリ』の初の日本語訳である。訳者の増野三良は、ノーベル賞受賞以前からタゴールに注目し、「失楽 (ザムボア)」1913年の2月号に初めてタゴール詩の日本語訳を載せている。ほかに『タゴールの詩と文：英和対訳：詳註』(1915) (No.16) など、『ギータンジャリ』は、日本でも早い段階から多くの翻訳が出版された。

元本となった英語版の *Gitanjali* (No.14) は、1912年の11月に the India Society of London より限定750部で出版されたが、非常に好評であったため、翌13年の3月に Macmillan 社より改めて出版され、同年のうちに13回も増刷されており、同じ年の11月にノーベル賞受賞が決定した。本書は1919年の版である。



タゴール Rabindranath Tagore

一方でタゴールがベンガル語詩人であることも早くから知られていたが、ベンガル語からの初の日本語訳は1924年(大正13年)の『ゴーラ』(No.18)まで待たなければならなかった。訳者の佐野甚之助はタゴールの開いた学園に柔術教師として招かれたのちベンガル語を学び、『ゴーラ』の翻訳はタゴール本人からの勧めによるという。オリジナルの *Gorā* (গোরা) (No.17) が出版されたのは1910年で、本書は、同年初版のものである。

タゴールは生涯、ほとんどの著作をベンガル語でなし、それらは、大部分カルカッタ(現コルカタ)から出版された。今回はそれらのうちの初版本3冊を展示している。*Kshanikā* (ক্ষণিকা) (No.19) は1900年、まだタゴールがそれほど知られていない時期の出版で、本書は出版人のサイン入りなので、おそらく出版人が自分用に取っておいたものと思われる。*Kheyā* (খেয়া) (No.20) は1906年、*Punaśca* (পুনশ্চ) (No.21) は1932年の出版で、後者はタゴール自らが立ち上げた学園である Visvabharati が出版元となっており、1925年以降はほとんどの著作がここから出されている。

タゴールは1916年(大正5年)に初めて来日するが、その際に紀行文をしたため、*Sabuja patra* (সবুজ পত্র) (No.22) という雑誌に掲載された。本書は、タゴールが神戸から送った文章を掲載した1916年のものである。これらの連載は1919年に *Japan Yatri* (日本紀行者) の題で単行本として出版されたが、その日本語訳「日本の旅」(『タゴールと日本：日本の旅・瞑想』(No.23) 所収) は1961年(昭和36年)にタゴール記念会から出されている。

(解説：丹羽京子)

## 展示資料一覧

No.	タイトル	著者	出版者
<b>ケース 1</b>			
1.	Ṭīlism-i hosh rub ā , tarjamah-yi d ā st ā n-i Am ī r Ḥ amzah ṣ ā ḥ ib-iqur ' ā n (طلسم ہوش ربا , ترجمہ داستان امیر حمزہ صاحبقران)	J ā h, Mu ḥ ammad Ḥ usain Qamar, A ḥ mad Ḥ usain (محمد حسین جاہ , احمد حسین قمر)	نولکشور , 1930
	【請求記号】 SARDA-NKU/929.933/176779/6	【標題紙・目次画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/8972">http://hdl.handle.net/10108/8972</a>
2.	Prem s ā gar (پریم ساگر)	Far ḥ at, Shankar Day ā l (شنکر دیال فرحت)	نولکشور , 1879
	【請求記号】 SARDA-NKU/929.831/157128	【全文画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/8446">http://hdl.handle.net/10108/8446</a>
3.	Go-d ā na (गो-दान)	Premacanda (लेखक, प्रेमचन्द)	सरस्वती-प्रेस, हिन्दी-ग्रन्थ-रत्नाकर कार्यालय , 1936
	【請求記号】 蒲生文庫/III/4		
4.	Vaq ā ' i ' -i Sh ā h Mu ' ī n al-D ī n Chisht ī : kah tarjamah-i b ā b-i sivvum-i Hid ā yat al-Mu ' ī n ast (وقائع شاه معین الدین چشتی : کہ ترجمہ باب سوم ہدایۃ المعین است)	B ā b ū l ā l (بابولال)	نولکشور , 1913
	【請求記号】 SARDA-NKP/167.8/176275	【全文画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/12059">http://hdl.handle.net/10108/12059</a>
<b>ケース 2</b>			
5.	Kulliy ā t-i Saud ā (کلیات سودا)	Saud ā , Mirz ā Mu ḥ ammad Rafi ' (سودا)	نولکشور , 1932
	【請求記号】 SARDA-NKU/929.851/176753	【標題紙画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/8908">http://hdl.handle.net/10108/8908</a>
6.	Kulliy ā t-i Ṣ afar (کلیات ظفر)	Muhammad Bahadur Shah II, King of Delhi	نولکشور , 1887
	【請求記号】 SARDA-NKU/929.851/176158	【全文画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/8647">http://hdl.handle.net/10108/8647</a>
7.	D ī v ā n-i N ā si k ḥ (دیوان ناسخ)	Nāsikh, Imām Bakhsh (ناسخ)	نولکشور , 1907
	【請求記号】 SARDA-NKU/929.851/176160	【全文画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/13048">http://hdl.handle.net/10108/13048</a>
<b>ケース 3</b>			
8.	Singhasun butteessee	Sundar Kavīśvar 'Ali Javān, Mirzā Kāzīm Lallu Lal	The College of Fort William , 1805
	【請求記号】 I2/9I2-9/506829	【全文画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/5985">http://hdl.handle.net/10108/5985</a>
9.	Singh ā san batt ī s ī (سنگھاسن بتیسی)		راجہ رام کمار , 1953
	【請求記号】 SARDA-NKU/929.883/157161	【標題紙画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/8653">http://hdl.handle.net/10108/8653</a>
<b>ケース 4</b>			
10.	R ā ja-n ī ti : a collection of Hindu apologues in the Braj Bh ā sh ā language, with a preface, notes, and supplementary glossary. Rev. ed	Lallu Lal	Presbyterian Mission Press , 1854
	【請求記号】 HUB/I2/634572	【全文画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/53193">http://hdl.handle.net/10108/53193</a>
11.	General Principles of inflection and conjugation in Bruj B,hak,ha	Shree Lulloo Lal Kuwi	Printed at the India Gazette Press , 1811
	【請求記号】 HUB/I2/599578	【全文画像】	<a href="http://hdl.handle.net/10108/16547">http://hdl.handle.net/10108/16547</a>

No.	タイトル	著者	出版者
<b>ケース 5</b>			
12.	The Holy Bible (in Multani language & Script), vol.2	Serampore Missionaries	the Mission Press ,1819
【請求記号】 HUB/I3/515835		【全文画像】 <a href="http://hdl.handle.net/10108/612">http://hdl.handle.net/10108/612</a>	
<b>ケース 6</b>			
13.	Les Hindouïs, 4 tom.	Solvyns, Balt. (Balthazar)	Chez l'auteur ,1808-1812
【請求記号】 HUB/N/610942/1~4		【全文画像】 <a href="http://hdl.handle.net/10108/41082">t.1 : http://hdl.handle.net/10108/41082</a> <a href="http://hdl.handle.net/10108/41086">t.2 : http://hdl.handle.net/10108/41086</a> <a href="http://hdl.handle.net/10108/41088">t.3 : http://hdl.handle.net/10108/41088</a> <a href="http://hdl.handle.net/10108/41090">t.4 : http://hdl.handle.net/10108/41090</a>	
<b>ケース 7</b>			
14.	Gitanjali (Song offerings). Indian ed.	Tagore, Rabindranath Yeats, W. B. (William Butler)	MacMillan ,1919
【請求記号】 C.B.C/53878			
15.	ギタンジャリ(歌の祭賛) : 印度新詩集	Tagore, Rabindranath 増野, 三良	東雲堂書店 ,1915
【請求記号】 A/9I3-8/T128-11			
16.	タゴールの詩と文 : 英和對譯 : 詳註	Tagore, Rabindranath 花園, 兼定	ジャパントイムス学生號出版所 ,1915
【請求記号】 HUB/A/651440			
17.	Gorā (গোরা)	Tagore, Rabindranath (রবীন্দ্রনাথ ঠাকুর)	ইণ্ডিয়ান পাব্লিশিং হাউস ,1910
【請求記号】 C.B.C/53818			
18.	ゴーラ	Tagore, Rabindranath 佐野, 甚之助	大雄閣 ,1924
【請求記号】 HUB/A/625924			
19.	Kshaṇikā (ক্ষণিকা)	Tagore, Rabindranath (রবীন্দ্রনাথ ঠাকুর)	ভারত যন্ত্র ,1900
【請求記号】 C.B.C/53833			
20.	Kheṅkā (খেয়া)	Tagore, Rabindranath (রবীন্দ্রনাথ ঠাকুর)	মজুমদার প্রেস ,1906
【請求記号】 C.B.C/53832			
21.	Punāśca (পুনশ্চ)	Tagore, Rabindranath (রবীন্দ্রনাথ ঠাকুর)	বিশ্বভারতী-গ্রন্থালয় ,1932
【請求記号】 C.B.C/53853			
22.	Sabuja patra vol.1323 (সবুজ পত্র)	Chaudhuri, Pramatha (চৌধুরী, প্রমথ)	কালিক প্রেস ,1916
【請求記号】 C.B.C/53885			
23.	タゴールと日本 : 日本の旅・瞑想	Tagore, Rabindranath 塔ゴール記念会	タゴール記念会 ,1961
【請求記号】 A/9I3-8/T128-6			

上記資料の他、本学ウルドゥー語専攻のご厚意により以下をお借りし展示及び上映を行いました。

- ・ウルドゥー語専攻語劇「ウムラーオ・ジャーン・アダー」の衣装及び映像
- ※語劇は東京外国語大学第93回外語祭(2015年11月22日)にて上演されたもの
- ・ウルドゥー語タイプライター(手動式)